

博士論文（要約）

論文題目 テレビ番組制作過程に於ける編成主導体制の影響
～「送り手」と「作り手」を分離した視座から～

氏 名 松井 英光

テレビ番組制作過程に於ける編成主導体制の影響

～「送り手」と「作り手」を分離した視座から～

社会情報学専門分野 博士課程 松井 英光

序 章 本稿の研究動機・問題意識・研究方法

- 0-1 研究動機および研究目的
- 0-2 研究対象および研究方法
- 0-3 全体構成

第1章 テレビ番組制作過程論の先行研究

- 1-1 テレビ研究の系譜
 - 1-1-1 「受け手」論と「送り手」論の展開
 - 1-1-2 欧米に於ける「送り手」論の隆盛
- 1-2 「送り手」論の系譜
 - 1-2-1 テレビ局出身の研究者による「送り手」論
 - 1-2-2 東京大学新聞研究所の研究者による「送り手」論
 - 1-2-3 「送り手」論の射程と限界

第2章 「送り手」と「作り手」を分離した視座

- 2-1 民放キー局及び準キー局に於ける「送り手」と「作り手」
 - 2-1-1 「送り手」の定義
 - 2-1-2 「作り手」の定義
 - 2-1-3 「受け手」の定義
- 2-2 番組制作過程の「送り手」と「作り手」の関係モデル
 - 2-2-1 「制作独立型モデル」に於ける「送り手」と「作り手」
 - 2-2-2 「編成主導型モデル」に於ける「送り手」と「作り手」

第3章 「送り手」主導による制度構築の歴史研究

- 3-1 制度としての「視聴率」と「送り手」の関係性の歴史
 - 3-1-1 「送り手」主導による「視聴率」設定とシステムの変遷
 - 3-1-2 視聴率批判史に於ける問題点と「送り手」の対応
- 3-2 編成を中心とする「送り手」のメディア内部への影響の歴史
 - 3-2-1 「時間帯開発」編成による放送適合枠拡大と枠消滅
 - 3-2-2 営業と編成の「送り手内部」関係性の変遷

第4章 編成主導型モデル形成の歴史研究

- 4-1 第一期（1953～62）・「視聴率黎明期型モデル」
- 4-2 第二期（1963～81）・TBS「制作独立型モデル」
- 4-3 第三期（1982～93）・フジテレビ「初期編成主導型モデル」
- 4-4 第四期（1994～2003）・日本テレビ「編成主導型モデル」
- 4-5 第五期（2004～2010）・フジテレビ「多メディア型モデル」
- 4-6 現状（2011～2016）・「超編成主導型モデル」の浸透

第5章 編成主導型モデルの事例研究

- 5-1 バラエティー『発掘！あるある大事典Ⅱ』制作体制の検証
- 5-2 報道番組『ザ・スクープ』枠移動と編成浸透の検証

第6章 制作独立型モデル再生の事例研究

- 6-1 ドラマ『相棒』制作主導による「自律性」回復の検証
- 6-2 ドラマ『勇者ヨシヒコと魔王の城』製作委員会体制の検証

終章 結論と展望

- 7-1 「編成主導型モデル」・「制作独立型モデル」に於ける問題点
- 7-2 「作り手」の「自律性」回復に向けた組織モデル提示
- 7-3 「作り手」論独立視座構築の意義と展望

本文

すでに出版されたため全文公表できません。
以下の刊行物の書誌情報をご参照ください。

『新テレビ学講義 もっと面白くするための理論と実践』

(河出書房新社、2020 年 11 月)

発売日： 2020/11/11

単行本： 462 ページ

ISBN-10： 4309922163

ISBN-13： 978-4309922164

http://www.kawade.co.jp/np/search_result.html?writer_id=00699

＜参考文献＞

- 安達元一『視聴率 200%男』（光文社新書、2001）
- Ang,I. (1991),*Desperately Seeking The Audience*,London:Routledge
- 浅田孝彦「“生”の力を結実させた初めての番組」『G A L A C』2003 年 4 月号「特集 テレビの“突破者”たち！」（放送批評懇談会、2003）
- 浅田孝彦『ニュースショーに賭ける』（現代ジャーナリズム出版会、1968）
- 浅田孝彦『ワイド・ショーの原点』（新泉社、1987）
- 浅野太「低予算を強調してヒットした『勇者ヨシヒコ』の続編の狙い」『日経エンタテインメント！』2012 年 12 月号（日経 B P 社、2012）
- バーワイズ・P、エーレンバーグ・A 著、田中義久訳『テレビ視聴の構造』（法政大学出版局、1991）
- ばばこういち『されどテレビ半世紀』（リベルタ出版、2001）
- ばばこういち『視聴率戦争—その表と裏—』（岩波ブックレット、1996）
- Caldwell, J.(2008), *Production Culture: Industrial Reflexivity and Critical Practice in Film/Television*, Durham, NC and London: Duke University Press
- Caldwell, J.(1995), *Televisuality : Style, Crisis, and Authority in American television*, New Brunswick, N.J. : Rutgers University Press
- 沈成恩「韓国映像ビジネス興隆の背景～文化産業政策と放送の海外進出～」、『放送研究と調査』2006 年 12 月号（NHK出版、2003）
- Davis, H. and Scase, R. (2000), *Management Creativity*. Buckingham: Open University Press
- 土橋臣吾「アクターとしてのオーディエンス」、小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたのか [テレビ・オーディエンスのいる風景]』（せりか書房、2003）
- 遠藤知己「メディアそして/あるいはリアリティー多重メビウスの循環構造」『思想』2003 年第 12 号「テレビジョン再考」（岩波書店、2003）
- 藤平芳紀『視聴率 ‘96』（大空社、1997）
- 藤平芳紀『視聴率 ‘97』（大空社、1998）
- 藤平芳紀『視聴率 ‘98』（大空社、1998）
- 藤平芳紀『視聴率の謎にせまる デジタル放送時代を迎えて』（ニュートンプレス、1999）
- 藤平芳紀「視聴率のナゾ 視聴率調査一社独占の功罪」『G A L A C』2002 年 5 月号（放送批評懇談会、2002）
- 藤平芳紀「視聴率のナゾ テレビ放送と視聴率調査のあゆみ①」『G A L A C』2003 年 3 月号（放送批評懇談会、2003）
- 藤平芳紀「視聴率のナゾ テレビ放送と視聴率調査のあゆみ②～1980 年代量から質へ～」

『GALAC』2003年4月号（放送批評懇談会、2003）

藤平芳紀「視聴率のナゾ テレビ放送と視聴率のあゆみ③ 1990年代～今日に至る視聴率調査」『GALAC』2003年5月号（放送批評懇談会、2003）

藤平芳紀「視聴率のナゾ 変わってきたテレビの見方」『GALAC』2003年10月号、（放送批評懇談会、2003）

藤平芳紀「視聴率のナゾ ニュースステーション誕生余話」『GALAC』2003年11月号、（放送批評懇談会、2003）

藤平芳紀「視聴率のナゾ 視聴率不正工作事件の意味すること」『GALAC』2004年3月号（放送批評懇談会、2004）

藤平芳紀「視聴率のナゾ 日本式MRCの設置に向けて」『GALAC』2004年10月号（放送批評懇談会、2004）

藤平芳紀『視聴率の正しい使い方』（朝日新聞社、2007）

藤竹暁「思想の言葉 環境となったテレビ」『思想』2003年12月号「テレビジョン再考」（岩波書店、2003）

藤竹暁『テレビの理論』（岩崎放送出版社、1969）

藤竹暁「テレビ研究の20年」『新聞学研究』22号（日本マス・コミュニケーション学会、1973）

藤竹暁『テレビとの対話』（日本放送出版協会、1974）

藤竹暁『テレビメディアの社会力』（有斐閣、1985）

藤竹暁 山本明『図説 日本のマス・コミュニケーション』（日本放送出版協会、1994）

藤竹暁『図説 日本のマスメディア 第二版』（NHKブックス、2005）

藤田真文「テレビ40年-不惑の検証 未完のプロジェクト《放送学》テレビ実践活動に規範を与える政策科学を」『総合ジャーナリズム研究』30巻1号（東京社、1993）

フジテレビ調査部著『形而上のテレビ百論』（講談社、1990）

フジテレビ社長室編『フジテレビ十年史稿』（フジテレビ、1970）

福田陽一郎『渥美清の肘突き一人生ほど素敵なショーはない』（岩波新書、2008）

福田雄一「第90回・妻の目を盗んでテレビかよ 男前ってのは、彼のことを言うんだな」『週刊現代』（講談社、2011）

Garnham, N. (2000), *Emancipation, the Media and Modernity*, Oxford: Oxford University Press

Gitlin, T. (1983), *Inside Prime Time*, New York, NY: Pantheon

五味一男「1000万人の代弁者として番組をつくってきた」ビデオリサーチ・編『視聴率50の物語 テレビの歴史を創った50人が語る50の物語』（小学館、2013）

五味一男『視聴率男の発想術 「エンタの神様」仕掛け人の“ヒットの法則”』（宝島社、2005）

後藤和彦「編成・制作論の構想」『放送学研究』11号（日本放送出版協会、1965）

後藤和彦「編成における決定―一事例の問題発見的考察―」『放送学研究』18号（日本放送出版協会、1968）

後藤和彦『放送編成・制作論』（岩崎放送出版社、1967）

後藤和彦「放送研究の対象領域としての編成」『放送学研究』18号（日本放送出版協会、1968）

後藤和彦「テレビ研究の20年」『新聞学研究』22号（日本マス・コミュニケーション学会、1973）

萩原敏雄「改善策を十月編成から実施。クリエイターの努力を測る方法に、いろんな尺度を取り入れたい。」『GALAC』2004年10月号「特集 どうなる視聴率 どうする視聴質」（放送批評懇談会、2004）

萩原敏雄「特集 スポーツ次の“切り札”は？ 奥の深い、もっとおもしろい野球を！」『GALAC』2001年11月号（放送批評懇談会、2001）

濱田純一「5法制度論 自由」『マス・コミュニケーション研究』50号（日本マス・コミュニケーション学会、1997）

濱田純一『メディアの法理』（日本評論社、1990）

濱田純一『情報法』（有斐閣、1993）

花田達朗『公共圏という名の社会空間』（木鐸社、1996）

早川善次郎・小川肇「わが国のマス・コミ研究の現状について」『放送学研究』第22号（日本放送出版協会、1971）

林知己夫『調査の科学』（講談社、1984）

林知己夫編・杉山明子著『現代人の統計・社会調査の基本』（朝倉書店、1984）

林知己夫「視聴率調査の論理と倫理～機械による個人視聴率をめぐる～」『AURA』106号（フジテレビ編成局調査部、1994）

林利隆「求められる『専門職』としての意識—TBS取材テープ問題を考える」『新聞研究』1996年5月号（日本新聞協会、1996）

Hesmondhalgh, D.(2007), *The Cultural Industries*, Los Angeles: Sage Publications

平島廉久『検証視聴率』（日本能率協会マネジメントセンター、1993）

ホルスタイン・J、グブリウム・J、山田富秋他訳『アクティブ・インタビュー』（せりか書房、2004）

堀川とんこう『ずっとドラマを作ってきた』（新潮社、1998）

細野邦彦「不良番組であってもカルチャーだった」『GALAC』2003年4月号「特集 テレビの“突破者”たち」（放送批評懇談会、2003）

井原高忠『元祖テレビ屋大奮戦！』（文藝春秋、1983）

今村庸一「『電波少年』の冒険」『放送レポート』1995年9月号（メディア総合研究所、1995）

稲葉三千男「現代マス・コミ労働の特質」北川隆吉ほか編『講座 現代日本のマス・コミュニケーション 4 マス・メディアの構造とマス・コミ労働者』（青木書店、1973）

稲葉三千男『現代マスコミ論』（青木書店、1976）

稲田植輝『放送メディア入門』（社会評論社、1998）

井上宏『現代テレビ放送論 —〈送り手〉の思想—』（世界思想社、1975）

井上宏『テレビの社会学』（世界思想社、1977）

井上宏「テレビ編成の構造」大山勝美編『テレビ表現の現場からープロデューサー/ディレクター/編成編』、(二見書房、1981)

井上宏『テレビ文化の社会学』(世界思想社、1987)

石川明「組織の中のジャーナリスト」、花田達朗・廣井脩編『論争 いま、ジャーナリスト教育』(東京大学出版会、2003)

石光勝『テレビ番外地 東京12チャンネルの奇跡』(新潮新書、2008)

石沢治信「誰のための視聴率戦争だったのか 日テレ・フジ、年末年始の必死の攻防戦」『創』1995年3月号(創出版、1995)

石沢治信「90年視聴率戦争、フジテレビまたも独走」『創』1991年1月号(創出版、1991)

石沢治信「日テレ・フジの3冠王めぐる激闘」『創』1995年2月号(創出版、1995)

伊藤愛子『視聴率の戦士』(ぴあ、2003)

伊藤守・藤田真文編『テレビジョン・ポリフォニー』(世界思想社、1999)

伊藤隆紹「N T Vの独走か！？民放視聴率競争に新展開」『創』1995年8月号(創出版、1995)

伊豫田康弘・上滝徹也・田村穰生・野田慶人・煤孫勇夫『テレビ史ハンドブック』(自由国民社、1996)

加地倫三『たくらむ技術』(新潮新書、2012)

神山冨と検証特別取材班著『T B S ザ・検証 局にかわって私がやる！！』(鹿砦社、1996)

笠原唯央『テレビ局の人びと 視聴率至上主義の内情とプロダクションの悲喜劇』(日本実業出版社、1996)

片岡俊夫『放送概論 制度の背景をさぐる』(日本放送出版協会、1988)

加藤秀俊「視聴率の本質は何か 制作者側にほしいマスへの訴求意欲」『調査情報』1961年8月、32号「特集 《視聴率カルテ》」(東京放送調査部、1961)

加藤秀俊『テレビ時代』(中央公論文庫、1958)

加藤義彦、鈴木啓介、濱田高志『作曲家・渡辺岳夫の肖像 ハイジ、ガンダムの音楽を作った男』(ブルース・インターアクションズ、2010)

貴島誠一郎「レベルの低い作り手ほど視聴者のせいにする」『G A L A C』2001年5月号(放送批評懇談会、2001)

君塚良一『テレビ大捜査線』(講談社、2001)

岸田功「“放送”を学ぶ基礎 受け手の関心によって多様なアプローチが…」総合ジャーナリズム研究所編『総合ジャーナリズム研究 121号』(東京社、1987)

岸田功『テレビ放送人 私の仕事』(東洋経済新報社、1979)

岸田功『テレビ放送人 私の仕事 第2版』(東洋経済新報社、1986)

北田曉大『嗤う日本の「ナショナルイズム」』(NHK ブックス、2005)

小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたのか』(せりか書房、2003)

小林信彦『テレビの黄金時代』(文芸春秋、2002)

小池正春「地上波制圧！？日本テレビの視聴率哲学」『創』2001年1・2月号(創出版、2001)

- 小池正春『実録 視聴率戦争！』（宝島社新書、2001）
- 小池正春「検証！テレビ戦線異状あり 個人視聴率の可能性に賭けたニールセンの哀愁」『創』1995年2月号（創出版、2004）
- 小池正春「三冠の方程式は堅実 “森型野球”」『新・調査情報』1999年11月、第20号「特集 日テレ式高視聴率の背景をよむ」（東京放送編成考査局、1999）
- 小池正春『TV 大人のみかた テレビ生活者のスマート・ナビ』（ダイヤモンド社、1998）
- 個人視聴率調査懇談会「機械式個人視聴率調査検証報告書（概要）」『月刊民放』1996年9月号「特集 個人視聴率」（日本民間放送連盟、1996）
- 小中陽太郎「視聴率の物神化を批判する」『放送レポート』186号（メディア総合研究所、2004）
- 神足裕司「視聴率、この祝福されざる道具…の巻」『週刊SPA!』1991年3月6日号（扶桑社、1991）
- 今野勉『それでもテレビは終わらない（岩波ブックレット No.797）』（岩波書店、2010）
- 久保田了平「放送調査とはどういうものか N調査機関ニールセンの効用とその限界」『調査情報』1961年8月、（東京放送調査部、1961）
- 隈元信一「転機迎えたテレビ視聴率」『AERA』1990年6月19日号（朝日新聞社、1990）
- ラスウェル・D・H「社会におけるコミュニケーションの構造と機能」シュラム・W編、学習院大学社会学研究室訳『新版 マス・コミュニケーション マス・メディアの総合的研究』（東京創元社、1968）
- ラザースフェルド・F・P、ベレルソン・B、ゴードッド・H 著、有吉広介監訳『ピープルズ・ CHOICE アメリカ人と大統領選挙』（芦書房、1987）
- マクルーハン・M、カーペンター・E 編著、大前正臣・後藤和彦訳『マクルーハン理論』（平凡社ライブラリー、2003）
- 「マーケティングなし、タブーなしが生んだ大ヒット『相棒』を10倍楽しむ完全ガイド スペシャル鼎談 脚本家輿水泰弘×ゼネラルプロデューサー松本基弘×水谷豊」『週刊文春』2012年10月18日号（文藝春秋、2012）
- 松田浩『ドキュメント 放送戦後史Ⅰ』（双柿舎、1980）
- 松田浩『ドキュメント 放送戦後史Ⅱ』（双柿舎、1981）
- 松井英光「メディアを規定する視聴率を巡るテレビの作り手研究～放送デジタル化における新評価基準とメディアの行方まで～」（東京大学大学院修士論文、2004）
- 松井英光「TV外交～トーキョーはアジアのハリウッドになれるか？ブラウン管を通しての国際PR外交～」（慶應義塾大学法学部政治学科卒業論文、1989）
- 松村由彦「信頼性の高い調査の導入を～個人視聴率調査にはPPMが最適～」『AURA』106号（フジテレビ編成局調査部、1994）
- 松山秀明「テレビジョンの学知—1960年代、放送学構想の射程」『マス・コミュニケーション研究』第85巻（日本マス・コミュニケーション学会、2014）
- マートン・R 著、森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』（みすず書

房、1961)

マートン・R 著、柳井道夫訳『大衆説得—マス・コミュニケーションの社会心理学』(桜楓社、1970)

南博ほか編『マス・コミュニケーション講座<第 4 巻>映画・ラジオ・テレビ』(河出書房、1954)

南博「テレビと人間」南博編『講座 現代マス・コミュニケーション 2 テレビ時代』(河出書房新社、1960)

南博「序論—パーソナル芸術・マス化芸術・マス芸術—」南博他編『講座 現代芸術』第四卷(勁草書房、1961)

美ノ谷和成『放送メディアの送り手研究』(学文社、1998)

民放五社調査研究会編『日本の視聴者』(誠文堂新光社、1966)

民放五社調査研究会編『続・日本の視聴者』(誠文堂新光社、1969)

水越伸「メディア・プラクティスの地平」水越伸、吉見俊哉編『メディア・プラクティス』(せりか書房、2002)

水越伸「日本におけるテレビ放送研究の系譜—「テレビジョン」特集と「放送学」構想にみる限界と有効性—」『社会情報と情報環境』(東京大学出版会、1994)

水越伸『新版 デジタル・メディア社会』(岩波書店、2002)

水島久光「視聴率問題が提起する、メディアと産業の新しい関係」『月刊民放』2004 年 2 月号(日本民間放送連盟、2004)

水島久光『テレビジョン・クライシス 視聴率・デジタル化・公共圏』(せりか書房、2008)

森俊幸「広告効果の詳細を素早く知りたい～日記式調査の機械化で精度とスピードのアップを～」『AURA』106 号「特集 個人視聴率問題を徹底検証」(フジテレビ編成局調査部、1994)

毛利嘉孝「“イラク攻撃”、“テレビ”、そして“オーディエンス”」小林直毅・毛利嘉孝編『テレビはどう見られてきたのか』(せりか書房、2003)

村上七郎『ロングラン マスコミ漂流 50 年の軌跡』(扶桑社、2005)

村木良彦『ぼくのテレビジョン—あるいはテレビジョン自身のための広告』(田畑書店、1971)

室田泰志「良質な番組を支援する！リーディングカンパニーの選択基準」『GALAC』2002 年 10 月号「スポンサーに聞いちゃいました！番組提供の理由」(放送批評懇談会、2002)

中島仁「偏差値世代の個人視聴率観～泥縄式調査部卒業論文～」『AURA』106 号(フジテレビ編成局調査部、1994)

中野収『メディア空間』(勁草書房、2001)

中野収「特集 テレビ 50 年の通信簿—テレビ論のはたしてきたこと—」『AURA』157 号(フジテレビ編成制作局調査部、2003)

生田日常義『新時代テレビビジネス 半世紀の歩みと展望』(新潮社、2000)

NHK総合放送文化研究所編『テレビで働く人間集団』(日本放送出版協会、1983)

NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間・2000—NHK国民生活時間調査』(日本放送

出版協会、2002)

NHK放送世論調査所編『テレビ視聴の30年』(日本放送出版協会、1983)

NHK放送文化研究所編『NHK放送文化研究所年報2012』(NHK出版、2012)

NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』(日本放送出版協会、2003)

日本放送協会編『放送の五十年—昭和とともに』(日本放送出版協会、1977)

日本放送協会総合放送文化研究所・放送学研究室編集『放送学研究28 日本のテレビ編成』
(日本放送出版協会、1976)

日本放送出版協会編『「放送文化」誌にみる 昭和放送史』(日本放送出版協会、1990)

日本民間放送連盟放送研究所編『デジタル放送産業の未来』(東洋経済新報社、2000)

日本民間放送連盟放送研究所編『民間放送五十年史』(日本民間放送連盟放送研究所、2001)

日本民間放送連盟放送研究所編『民間放送三十年史』(日本民間放送連盟放送研究所、1981)

日本民間放送連盟放送研究所編『民間放送十年史』(日本民間放送連盟放送研究所、1961)

日本民間放送連盟放送研究所編『視聴率の見かた』(日本民間放送連盟放送研究所、1967)

日本民間放送連盟放送研究所編『視聴率を補完する充足度システム』(日本民間放送連盟放送研究所、1979)

日本テレビ放送網社史編纂室編『大衆とともに25年 沿革史』(日本テレビ放送網株式会社、1978)

日本テレビ放送網社史編纂室編『大衆とともに25年 写真集』(日本テレビ放送網株式会社、1978)

西渕憲司「主婦は午前中のニュースだって見る!」『GALAC』2001年5月号(放送批評懇談会、2001)

西垣通『マルチメディア』(岩波新書、1994)

仁科俊介「見て“得”したと思う番組」『GALAC』2003年4月号「特集 テレビの“突破者”たち」(放送批評懇談会、2003)

西正・野村敦子『多チャンネル放送の衝撃』(中央経済社、1997)

西正『テレビが変わる』(ごま書房、1999)

西正『図解 放送業界ハンドブック』(東洋経済新報社、1999)

丹羽美之「テレビが描いた日本—ドキュメンタリー番組の五十年」『AURA』157号「特集 テレビ50年の通信簿」(フジテレビ編成制作局調査部、2003)

野崎茂『第二世代テレビの構想VP、CATV、空中波』(現代ジャーナリズム出版会、1970)

小田久榮門『テレビ戦争勝組の掟 仕掛人のメディア構造改革論』(角川書店、2001)

小田義文「“テレビ視聴率調査対象世帯への不正干渉”に対するビデオリサーチの対応」『月刊民放』2004年2月号(日本民間放送連盟、2004)

オフィス・マツナガ『なぜフジテレビだけが伸びたのか—独自の宣伝戦略・番組づくりにみる「アピール・テクニク」の秘密』(こう書房、1990)

荻野祥三「視聴率時代の終わりの始まり」『AURA』162号(フジテレビ編成制作局調査部、2003)

岡部慶三「科学としての放送研究（１）-いわゆる「放送学」理論の性格について-」『放送学研究』１号（日本放送出版協会、1961）

岡部慶三「科学としての放送研究（２）-「放送学」の課題について-」『放送学研究』２号（日本放送出版協会、1962）

岡部慶三「科学としての放送研究（３）-放送研究と「放送学」-」『放送学研究』７号（日本放送出版協会、1964）

岡部慶三「特集・放送学研究の 25 年 第 1 章 放送学の課題と方法—草創期における論点を中心に」『放送学研究』35 号（日本放送出版協会、1985）

奥田良胤「第 X 章 番組制作と放送倫理」島崎哲彦・池田正之・米倉律編『放送論』（学文社、2009）

大石泰彦「ジャーナリストの自由と倫理—フランス、そして日本」『新聞研究』1995 年 11 月号（日本新聞協会、1995）

大倉文雄『2000 年代 テレビはデジタル化で変わる』（日本図書刊行会、2000）

大下英治『NHK王国ヒットメーカーの挑戦』（講談社、1994）

大竹和博他「座談会 視聴率の“質”向上を急げ！」『GALAC』2004 年 3 月号（放送批評懇談会、2004）

大多亮『ヒットマン テレビで夢を売る男』（角川書店、1996）

太田省一・長谷正人編著『テレビだよ！全員集合 自作自演の 1970 年代』（青弓社、2007）

大山勝美編『テレビ表現の現場から—プロデューサー・ディレクター・編成編』（二見書房、1981）

大山勝美『時代の予感』（東洋経済新報社、1990）

音好宏「個人視聴率・視聴質〜この 10 年の歩み〜」『AURA』106 号（フジテレビ編成局調査部、2003）

音好宏、日吉昭彦「テレビ番組の放映内容と放送の“多様性”〜地上波放送のゴールデンタイムの内容分析調査〜」『コミュニケーション研究』第 38 号（上智大学コミュニケーション学会、2008）

王東順「今までにない番組をつくる喜び」『GALAC』2003 年 4 月号「特集 テレビの突破者たち！」（放送批評懇談会、2003）

ポルトラック・F・D「アメリカが経験した事〜PM導入が米国TV界をどう変えたか〜」『AURA』106 号（フジテレビ編成局調査部、1994）

プライス・A・D 著、櫻井祐子訳『ピクサー 早すぎた天才たちの大逆転劇』（早川書房、2015）

Riley, J.W. and Riley, M.W. (1959) 'Mass Communication and the Social System' in Merton, R.K. (ed), *Sociology Today - Problems and Prospects*, New York: Basic Books.

ライリー・J・M. 著、宇賀博訳「マス・コミュニケーションと社会体系」『新聞研究』1961 年 9 月号（日本新聞協会、1961）

Ryan, B. (1992), *Making Capital from Culture The Corporate Form of Capitalist Cultural Production*, Berlin and New York NY: Walter De Gruyter

「最近のテレビ番組視聴率とラジオ番組聴取状況－MMR をめぐって－」『調査情報』1958年9月上旬号（ラジオ東京調査部、1958）

境真良『テレビ進化論 映像ビジネス覇権のゆくえ』（講談社、2008）

坂本衛「制作プロダクションの現実」『創』1993年8月号（創出版、1993）

笹川巖「ピープルメーターをめぐる近年の事情と論点」『調査情報』1993年2月号（TBS編成考査部、1993）

佐藤孝吉『僕がテレビ屋サトーです 名物ディレクター奮戦記 「ビートルズ」から「はじめてのおつかい」まで』（文藝春秋、2004）

澤田隆治「上方喜劇を超え全国区へ」『GALAC』2003年4月号「特集 テレビの“突破者”たち」（放送批評懇談会、2003）

澤田隆治「面白い番組をつくれば、いまでも視聴率40%は取れる」ビデオリサーチ・編『視聴率50の物語 テレビの歴史を創った50人が語る50の物語』（小学館、2013）

シュラム・W 編、学習院大学社会学研究室訳『新版 マス・コミュニケーション マス・メディアの総合的研究』（東京創元社、1968）

千田利史『メディアショック』（電通、2002）

志賀信夫『デジタル時代の放送革命』（源流社、2000）

志賀信夫『放送』（日本経済新聞社、1986）

志賀信夫『国際化時代の 世界のテレビ』（丸善、1994）

志賀信夫『新テレビ時代』（丸善、1993）

志賀信夫『テレビ社会史』（誠文堂新光社、1969）

志賀信夫『人物による放送史』（源流社、1977）

執行文子「若者のネット動画利用とテレビへの意識～“中高生の動画利用調査”の結果から～」NHK放送文化研究所編『NHK放送文化研究所年報2012』（NHK出版、2012）

島森路子「なにを・いつ・いかに放送するか」NHK総合放送文化研究所編『テレビで働く人間集団』（日本放送出版協会、1983）

清水幾太郎『社会心理学』（岩波書店、1951）

清水幾太郎「テレビジョン時代」『思想』413号（岩波書店、1958）

清水幾太郎「テレビ時代のマス・コミュニケーション」『講座 現代マス・コミュニケーション1 マス・コミュニケーション総論』（河出書房新社、1961）

辛坊治郎『TVメディアの興亡ーデジタル革命と多チャンネル時代』（集英社新書、2000）

白石信子・井田美恵子「浸透した『現代的なテレビの見方』 平成14年10月“テレビ50年調査”から」『放送研究と調査』2003年5月号（NHK出版、2003）

菅谷実・中村清『放送メディアの経済学』（中央経済社、2000）

菅谷実『アメリカのメディア産業制作 ー通信と放送の融合』（中央経済社、2000）

田原茂行『テレビの内側で』（草思社、1995）

田原総一郎『テレビ仕掛人たちの興亡』（講談社、1990）

田原総一郎他「座談会…田原総一郎×ばばこういち×吉永春子 視聴率調査とテレビの現実」『創』2004年1・2月号「特集 日本テレビ視聴率買収事件」（創出版、2004）

高木教典「マス・メディアの構造と生産過程」北川隆吉ほか編『講座 現代日本のマス・コミュニケーション 4 マス・メディアの構造とマス・コミ労働者』（青木書店、1973）

高木教典「〈シンポジウム〉・放送研究の進め方 〈報告〉マス・メディア産業論と放送研究」『新聞学評論』第13号（日本マス・コミュニケーション学会、1963）

田辺勝則「食卓のテレビから見た一考察」『新・調査情報』1999年11月号、（東京放送編成調査局、1999）

田中晃「変貌する視聴率戦略～世帯から個人へ」『放送文化』2004年春号（NHK出版、2004）

谷富夫・芦田徹郎編著『よくわかる質的社会調査 技法編』（ミネルヴァ書房、2009年）

TBS調査部編『情報未来学序説（70年代情報シリーズ1巻）』（ブロンズ社、1970）

テレビ東京30年史編纂委員会編『テレビ東京30年史』（テレビ東京、1994）

弟子丸千一郎「時代の鏡となる番組をつくる！」『GALAC』2003年4月号「特集 テレビの“突破者”たち」（放送批評懇談会、2003）

東京大学社会情報研究所、東京大学新聞研究所編『放送制度論のパラダイム』（東京大学出版会、1994）

東京放送編『東京放送のあゆみ』（東京放送、1965）

鳥越俊太郎『ニュースの達人 「真実」をどう伝えるか』（PHP新書、2001）

Tschmuck, P.(2006), *Creativity and Innovation in the Music Industry*, Berlin: Springer

津田浩司「ワイドショー・情報番組、ボーダーレス化の現在」『創』1994年7月号、（創出版、1994）

筑紫哲也「自我作古 視聴率についてお訊ねへのお答」『週刊金曜日』1996年5月24日号（金曜日、1996）

筑紫哲也「やっかいなのは“利口馬鹿”な人びと」『GALAC』2001年5月号、（放送批評懇談会、2001）

植田康夫、伊豫田康弘、小林宏一「開拓途上における研究の位相と展開」『新聞学評論』39号（日本マス・コミュニケーション学会、1990）

上村忠「視聴率機械式個人調査の早期導入に強く反対する 放送文化全般の問題として討議 尽くすべき」『月刊民放』1994年4月号（日本民間放送連盟、1994）

上村忠「視聴率をどう使うか 量と質の両立は果たして可能か」『調査情報』1961年8月、32号、（東京放送調査部、1961）

瓜生忠夫「受けて側の生活分析 電波媒体の経済構造18」『調査情報』1963年4月、51号、（東京放送調査部、1963）

ビデオ・リサーチ編『視聴率15年』（ビデオ・リサーチ、1977）

ビデオ・リサーチ編『視聴率20年』（ビデオ・リサーチ、1982）

ビデオ・リサーチ編『視聴率30年』（ビデオ・リサーチ、1993）

ビデオ・リサーチ編『視聴率の正体』（廣松書店、1983）

渡辺久哲「連載・視聴率 どの調査方法にも一長一短 —テレビの多様な特徴をどうとらえるか」『月刊民放』1993年7月号（日本民間放送連盟、1993）

渡辺久哲「連載・視聴率 放送における人気の尺度」『月刊民放』1993年6月号、（日本民間放送連盟、1993）

渡辺みどり『現代テレビ放送文化論』（早稲田大学出版部、1997）
渡辺みどり『新版 現代テレビ放送学』（早稲田大学出版部、1986）
山田修爾『ザ・ベストテン』（新潮文庫、2008）
山田良明「データ分析から生まれる企画はない」『放送文化』2004 年春号「特集①テレビ局は視聴率をどう考えているか」（NHK 出版、2004）
山形弥之助「視聴率の調査に幅を 量的調査は必要だが、十分ではない」『調査情報』1961 年 8 月、32 号「特集 《視聴率カルテ》」、（東京放送調査部、1961）
ヤン・C『広告の科学 その発想と戦略』（中央公論社、1975 年）
横澤彪「“芸”の解体こそ新しい笑い」『GALAC』2003 年 4 月号「特集 テレビの突破者たち！」（放送批評懇談会、2003）
横澤彪『犬も歩けばプロデューサー』（NHK 出版、1994）
読売テレビ編『アメリカのテレビ』（読売テレビ放送、1969）
吉田正樹『怒る企画術！』（ベスト新書、2010）
吉田正樹「テレビは共有知。文化的バックグラウンドを支える」ビデオリサーチ・編『視聴率 50 の物語 テレビの歴史を創った 50 人が語る 50 の物語』（小学館、2013）
吉田直哉『霧中で影をあつめ』（NHK 出版、1995）
吉見俊哉「カルチュラル・スタディーズ」北川高嗣、須藤修、西垣通、浜田純一、吉見俊哉、米本昌平編『情報学事典』（弘文堂、2002）
吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』（人文書院、2003）
吉見俊哉「解題ー〈再録〉テレビジョン時代ー」『思想』2003 年第 12 号「テレビジョン再考」（岩波書店、2003）
吉見俊哉「経験としての文化 言語としての文化ー初期カルチュラル・スタディーズにおける“メディア”の位相」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』（せりか書房、2000）
吉見俊哉『メディア文化論 改訂版 メディアを学ぶ人のための 15 話』（有斐閣アルマ、2012）
吉見俊哉『メディア時代の文化社会学』（新曜社、1994）
吉見俊哉・水越伸『メディア論』（放送大学教育振興会、1997）
吉見俊哉「テレビが家にやって来たーテレビの空間 テレビの時間ー」『思想』2003 年第 12 号「テレビジョン再考」（岩波書店、2003）
吉見俊哉『都市のドラマトウロジー』（弘文堂、1987）
吉本隆明『状況としての画像 高度資本主義下の「テレビ」』（河出書房新社、1991）
郵政省郵政研究所編『21 世紀 放送の論点ーデジタル・他チャンネルを考える』（日刊工業新聞社、1998）
郵政省郵政研究所編『有料放送市場の今後の展望』（日本評論社、1997）
全国朝日放送編『テレビ朝日社史ーファミリー視聴の 25 年』（全国朝日放送、1984）

〈新聞〉

「朝日新聞」(2003 年 10 月 25 日付)

「朝日新聞」(2007 年 3 月 28 日付)

「報知新聞」(2004 年 6 月 11 日付)

「放送ジャーナル」(2004 年 1 月 23 日付)

「放送ジャーナル」(2004 年 3 月 10 日付)

「毎日新聞」(2007 年 3 月 8 日付)

「毎日新聞」(2015 年 7 月 8 日付)

「三田新聞」(1968 年 5 月 1 日付)

「日刊合同通信」(2003 年 11 月 5 日付)

「日刊合同通信」(2005 年 4 月 5 日付)

「日刊合同通信」(2015 年 1 月 6 日付)

「日刊スポーツ」(2004 年 1 月 6 日付)

「産経新聞」(2007 年 3 月 28 日付)

「産経新聞」(2015 年 9 月 15 日付)

「スポーツ報知」(2000 年 9 月 26 日付)

「東京新聞」(2004 年 6 月 1 日付)

「東京新聞」(2007 年 5 月 11 日付)

「読売新聞」(2003 年 10 月 25 日付)

〈テレビ番組〉

『はい！テレビ朝日です』～新春スペシャルトーク～『相棒』水谷豊&寺脇康文（2008年1月13日放送、テレビ朝日）

〈参考 URL〉

BPO「青少年委員会 審議事案 2000 年 4 月『おネプ!』テレビ朝日」、BPO ホームページ、<<http://www.bpo.gr.jp/?p=5111>>、2015 年 3 月 20 日閲覧。

フジテレビ「会社情報・組織図」、フジテレビホームページ、<<http://www.fujitv.co.jp/company/info/soshiki.html>>、2015 年 7 月 1 日閲覧。

Hesmondhalgh, D.(2013),*Media Industry Studies, Media Production Studies*
<http://www.academia.edu/1534970/Media_industry_studies_media_production_studies>、2014 年 9 月 15 日閲覧。

関西テレビ「『発掘!あるある大事典Ⅱ』調査報告書」、関西テレビホームページ、<<http://www.ktv.jp/info/grow/pdf/070323/houkokusyogaiyou.pdf>>、2014 年 2 月 15 日閲覧。

メディア総合研究所「テレビ朝日『ザ・スクープ』継続を要望する声明」、メディア総合研究所ホームページ、<<http://www.mediasoken.org/page038.html>>、2014 年 5 月 10 日閲覧。

NHK「NHKの世論調査について 沿革」、NHKオンライン、<<https://www.nhk.or.jp/bunken/yoron/nhk/history.html>>、2016 年 1 月 14 日閲覧。

日刊スポーツ「テレ朝は暴れん坊…朝 4 時から時代劇放送します」、日刊スポーツコムホームページ、2015 年 3 月 4 日配信
<<http://www.nikkansports.com/entertainment/news/1442161.html>>、2015 年 5 月 19 日閲覧。

日本テレビ「会社情報・組織図」、日本テレビホームページ、<<http://www.ntv.co.jp/info/organization/>>、2015 年 7 月 1 日閲覧。

ニュースウォーカー「『勇者ヨシヒコと魔王の城』で山田孝之、福田雄一監督らが深夜の“オフ会”開催」、ニュースウォーカーホームページ、2011 年 8 月 10 日配信
<<http://news.walkerplus.com/article/23864/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

オリコン「超低予算を武器に面白さを追求 ドラマ『勇者ヨシヒコと悪霊の鍵』」、オリコンスタイルホームページ、2012 年 10 月 13 日配信
<<http://www.oricon.co.jp/news/2017681/full/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

オリコン「水谷豊、3 人の“相棒”を語る 卒業後の活躍が楽しみ」、オリコンスタイルホー

ムページ、2015 年 3 月 11 日配信

<<http://www.oricon.co.jp/news/2049783/full>>、2015 年 5 月 30 日閲覧。

オリコン「山田孝之が勇者熱演！異色のドラクエ風ドラマ主演で“Lv99 目指す”」、オリコンスタイルホームページ、2011 年 5 月 16 日配信、

<<http://www.oricon.co.jp/news/87651/full/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

オリコン「山田孝之主演の低予算ドラマ『勇者ヨシヒコ』10 月にパート 2 放送」、オリコンスタイルホームページ、2012 年 5 月 16 日配信

<<http://www.oricon.co.jp/news/2011678/full/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

オリコン「“勇者” 山田孝之、RPG 風ドラマで体当たり演技も予算不足嘆く」、オリコンスタイルホームページ、2011 年 7 月 5 日配信

<<http://www.oricon.co.jp/news/89545/full/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

私的昭和テレビ大全集「マルマン深夜劇場（1962）」、私的昭和テレビ大全集ブログ、2014 年 4 月 27 日配信<goinkyo.blog2.fc2.com/blog-entry-878.html>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

TBS「会社情報・組織図」、TBS ホームページ、

<<http://www.tbsholdings.co.jp/information/soshikizu.html>>、2015 年 7 月 1 日閲覧。

テレビ朝日「相棒—激情版—スタッフブログ【526】相棒 season13、最後までご覧いただきありがとうございました 視聴者投稿コメント」、テレビ朝日ホームページ、

<<http://www.tv-asahi.co.jp/reading/aibou/23371/>>、2015 年 11 月 30 日閲覧。

テレビ朝日「『相棒』-3rd Season- 特集第一弾 特別対談チーフプロデューサー×脚本家（松本基弘×興水泰弘）」、テレビ朝日ホームページ、<[http://www.tv-](http://www.tv-asahi.co.jp/aibou_03/)

[asahi.co.jp/aibou_03/](http://www.tv-asahi.co.jp/aibou_03/)>、2013 年 5 月 26 日閲覧。

テレビ朝日「会社情報・組織図」、テレビ朝日ホームページ、<<http://company.tv-asahi.co.jp/contents/corp/formation.html>>、2015 年 7 月 1 日閲覧。

テレビ朝日「ラストメッセージ〜スタッフ編 ザ・スクープ終了にあたってプロデューサー原一郎」、テレビ朝日ホームページ、2002 年 9 月 28 日配信

<<http://www.tv-asahi.co.jp/scoop/special/staff.html>>、2004 年 11 月 11 日閲覧。

テレビ朝日報道番組「ザ・スクープ」存続を求める会「掘り起こしジャーナリズムの火を消さないで」、テレビ朝日報道番組「ザ・スクープ」存続を求める会ホームページ、

<<http://www.h5.dion.ne.jp/~scoop/indexold.htm>>、2014 年 5 月 10 日閲覧。

テレビドガッチ「福田雄一監督、続編に意欲満々！『勇者ヨシヒコと悪霊の鍵』Blue-

ray、DVD 発売記念イベント」、テレビドガッチホームページ、2013 年 4 月 22 日配信
<<http://dogatch.jp/news/tx/16058>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

テレビ東京「会社情報・組織図」、テレビ東京ホームページ<<http://www.tv-tokyo.co.jp/kaisha/company/organization.html>>、2015 年 8 月 8 日閲覧。

テレビ東京『『勇者ヨシヒコと魔王の城』秘蔵メイキング映像第 12 弾!』、テレビ東京ホームページ、2011 年 9 月 23 日配信<<http://www.tv-tokyo.co.jp/yoshihiko/>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

東亜日報「大ヒットしたのに、大損したという韓国ドラマ」、東亜日報日本語版ホームページ、2013 年 6 月 23 日配信<japanese.donga.com/List/3/all/27/422151/1>、2016 年 10 月 16 日閲覧。

梅田恵子「低ギャラでも出たい枠……テレ東深夜ドラマがまた豪華」、ニッカンスポーツ・コム、芸能記者コラム「梅チャンネル」、2015 年 4 月 17 日配信
<<http://www.nikkansports.com/entertainment/column/umeda/news/1458103.html>>、2015 年 6 月 29 日閲覧。

碓井広義「帰ってきたぞ、『勇者ヨシヒコ』」、碓井広義ブログ<上智大学教授のメディア時評>見たり、読んだり、書いたり、話したり、時々考えてみたり…、2012 年 10 月 13 日配信
<<http://blog.goo.ne.jp/kapalua227/e/423c5dc1b5fe27a0789785b78e52ff83>>、2015 年 10 月 22 日閲覧。

ビデオリサーチ「視聴率調査について」、ビデオリサーチホームページ、
<<http://www.videor.co.jp/>>、2015 年 4 月 15 日閲覧。

ビデオリサーチ「視聴率調査の歴史」、ビデオリサーチホームページ、
<<http://www.videor.co.jp/>>、2015 年 4 月 15 日閲覧。

ビデオリサーチ「視聴率の定義」、ビデオリサーチホームページ、<
<http://www.videor.co.jp/>>、2005 年 4 月 10 日閲覧、2015 年 4 月 15 日閲覧。

ビデオリサーチ「全局高世帯視聴率番組 50」、ビデオリサーチホームページ、
<<http://www.videor.co.jp/>>、2015 年 4 月 15 日、2015 年 10 月 20 日閲覧。

ZAKZAK「松方弘樹亡き父へ果たし状…近衛十四郎代表作に挑む 消えるテレ朝時代劇
枠の最終作『素浪人・月影兵庫』」、ZAKZAKホームページ、2007 年 7 月 17 日配信
<http://www.zakzak.co.jp/gei/2007_07/g2007071708.html>、2015 年 5 月 19 日閲覧。

論文の内容の要旨

論文題目 テレビ番組制作過程に於ける編成主導體制の影響
 ～「送り手」と「作り手」を分離した視座から～

氏 名 松 井 英 光

本論文は、1980年代よりテレビ局の内部で段階的に台頭してきた組織システムである「編成主導體制」が、制作現場の「自律性」を制約し、番組制作過程に多大な影響を及ぼしている実態を、「送り手」と「作り手」を分離する視座から考察した。

1980年代以降、テレビの制作部門を中心とする「作り手」と、非制作部門を中心とする、「送り手」の関係は大きく変化している。テレビ放送開始から1970年代までの初期段階では「作り手」を主体とする「制作独立型モデル」が主流であったが、1980年代以降は「送り手」を主体とする「編成主導型モデル」が主流となりつつある。この「制作独立型モデル」から「編成主導型モデル」への移行による影響は、視聴率の番組制作過程への浸透という形態で明確に現れている。実際に、「編成主導型モデル」の組織では、視聴率が獲得できないと判断された番組や「作り手」が淘汰され、類似番組の氾濫を助長する傾向が見られる。結果として、テレビ番組は「多様性」を喪失し、若年層を中心に「テレビ離れ」と言われる現象の拡大が指摘されている。

しかし、これまでのテレビ研究では、「送り手」と「作り手」が明確に区別されてこなかったため、テレビ局の組織における編成と制作の働きが混同されてしまい、こうした「編成主導體制」の確立が番組制作過程に及ぼす影響を適切に認識することは困難であった。視聴率至上主義批判が繰り返される一方で、その根底にある「編成主導體制」の問題点そのものは見過ごされてきたとも言える。

そこで本論文では、「作り手」と「送り手」を混同してきた従来のテレビ研究の枠組みを再検討し、この二つを分離した視座を採用した。そして、番組制作過程における編成の

影響力増大の歴史と、「編成主導體制」がもたらすテレビへの弊害を指摘し、「作り手」の「自律性」回復に向けて新たな組織モデル構築の必要性を提起した。

まず、第1章では本論文の先行研究を検討した。「受け手」論の豊富さに比較して、手薄と指摘される「送り手」論の系譜を確認し、そこに「作り手」論への視点が包括されてきたことを明らかにした。現在までの「送り手」論の先行研究では、明確に「作り手」を「送り手」から分離して考察する文献は見受けられない。1970年代後半までの「送り手」論を検証すると、「送り手」という概念に共通項が存在せず、「作り手」と「送り手」の概念が区別されない状態で、各種「送り手」論の議論自体が噛み合わない状態にあり、その後は、テレビの「送り手」論自体が衰退している。

もちろん、「作り手」論の要素を含む示唆的な研究として、後藤和彦の編成研究や、稲葉三千男の生産過程研究、井上宏の組織研究などがあり、これらは「送り手」論の一環として1960年代より議論されてきた。しかし、1970年代後半でその系譜は、ほぼ断絶している。その原因の一つとして、当時の「送り手」の定義に共通概念が存在していなかったことが挙げられる。その結果、個々の研究が分断され、大きな潮流を形成するに至らなかったと考えられる。

第2章では、こうした限界を乗り越え、「編成主導體制」の影響を明らかにするために、「作り手」を「送り手」から独立させたテレビ研究の枠組みを新たに設定した。まず、「作り手」と「送り手」をテレビ局の組織図や具体的な職制に基づいて、それぞれに定義した。そして、この「作り手」と「送り手」を分離した視座を用いて、民放キー局と準キー局を対象に、「作り手」と「送り手」の関係性を分析するための類型モデルを提示した。具体的には、「作り手」が「送り手」から「自律性」を確保した1980年代以前の「制作独立型モデル」と、「作り手」が「送り手」に吸収された1980年代以降の「編成主導型モデル」の二類型に分類した。

第3章以降は、上記の理論的考察から導き出した類型モデルを使って、歴史分析や事例分析を行った。研究方法としては質的調査法を採用し、文献調査に加えて、「作り手」や「送り手」の実務者に対するインタビュー調査を実施した。具体的には、2004年9月から2015年11月の間に、制作現場に従事するエキスパートを対象に、主に半構造化インタビューによる聞き取り調査を実施した。

第3章と第4章では、編成の影響力が次第に増大していく過程を歴史的に明らかにした。まず、第3章では前提となる基礎知識として「視聴率」の歴史や制度を検証し、テレビ内部で最重要ファクターとして機能してきたシステムを概観した。その上で、テレビ放送開始直後から、編成を中心とする「送り手」が視聴率の構造的な仕組みを解釈する方法により放送適合枠を徐々に拡大させ、現在の「全日放送」に昇華させた歴史を考察した。

次に、第4章ではテレビの「作り手」と「送り手」の関係性を、「制作独立型モデル」から「編成主導型モデル」への変遷を基軸に、第一期から第五期までに分類して考察した。第二期のTBS「制作独立型モデル」に対して、1980年代に第三期のフジテレビが「初期編成主導型モデル」を導入し、まず組織的に編成の「送り手」が制作現場の「作り手」を

吸収した。続いて、1990年代に第四期の日本テレビが番組制作過程にも編成の影響力を強化し、「編成主導型モデル」を確立させ、高視聴率獲得に向けてより効果的と思われる組織システムを完成させた。その後、民放キー局では「編成主導体制」が主流となり、現在も熾烈な視聴率競争を展開している。この「制作独立型モデル」から「編成主導型モデル」への移行による、番組制作過程への影響に焦点を当て、「作り手」と「送り手」を分離した視座により、編成の影響力増大の実態とテレビにもたらす作用を検証した。

第5章と第6章では個別番組を対象として、「編成主導体制」がテレビ番組の制作過程にもたらす影響について事例分析を展開した。具体的な事例分析の対象番組としては、まず第5章では、編成を中心とする「送り手」の影響により、番組制作現場における意思決定過程や企画段階で「作り手」の「自律性」喪失が顕在化した「編成主導型モデル」の典型例として、関西テレビ『発掘！あるある大事典Ⅱ』とテレビ朝日『ザ・スクープ』の2番組を検証した。そして、第6章では編成の番組制作過程への影響を最小限に抑制して、制作現場の「作り手」の「自律性」回復に成功した、現在では数少ない「制作独立型モデル」の事例として、テレビ朝日『相棒』とテレビ東京『勇者ヨシヒコと魔王の城』の2番組を対象に分析した。その際に、第5章、第6章ともに、当該番組の企画段階から制作過程までの意思決定過程の際の、編成を中心とする「送り手」と制作現場の「作り手」の力関係を、質的調査により検証した。

このように、本論文では「送り手」対「受け手」という従来のマスコミュニケーション過程の枠組みに「作り手」を加えて考察する方法で、テレビにおける「編成主導体制」の浸透を指摘し、その問題点を明示した。しかし、本論文では「作り手」の対象範囲を出演者や構成作家などを含まないプロデューサーやディレクターを中心に設定したため、広義の「作り手」までは網羅することができなかった。出演者や構成作家などの番組制作過程に対する影響は強力であり、本論文では未達の部分となったが、今後の研究で詳細な考察が必要であり、テレビ「作り手」論の適用範囲の拡大を将来的な課題としたい。

今後もテレビにおいて重要になるのは、視聴率から過度の制約を受けない番組制作過程の堅持であり、「編成主導型モデル」においても、「作り手」と「送り手」の境界線上での制作現場の「自律性」の確保が、「受け手」に対する番組の多様性保持に向けて必要となると想定される。終章では、制作現場の「作り手」の「自律性」回復に向けて最適な組織モデルとして、最終的に「初期編成主導型モデル」を修正した組織形態を提唱した。本論文は、放送文化の多様性に寄与する実践的な政策科学を目指すと同時に、1970年代後半から系譜が中断されている編成研究や生産過程研究などの「送り手」論の再興に繋がる、今後のテレビ研究の方向性を提示した。